天台宗【シリーズ年中行事】⑤

涅槃会のしおり

自灯明 法灯明 ～今につながるお釈迦さまの涅槃～

お葬式の祭壇には飾り花をお供えしますが、これはお釈迦さまが亡くなられるとき花が咲いたという沙羅双樹を意味しています。また、死者を北枕にして寝かす習慣も、お釈迦さまが頭を北に、顔を西に向けて亡くなったことに因んだものです。このように現代の葬送儀礼には、お釈迦さまの涅槃の様子をなぞらえたものが多くあります。

お釈迦さまの入滅に際し、弟子の阿難が尋ねます。

「お釈迦さまが亡くなられた後、私たちは何を頼りに生きていけばいいのですか」

お釈迦さまは阿難に言われました。

「これからは、仏の教えを灯とし（法灯明）、教えをもとに修行する自分自身を灯としなさい（自灯明）」と。

儀礼だけでなく、この言葉も現代に伝えていきたいものです。

仏の教えを学び、「ともしび」となる自分自身となりましょう。

発行：天台宗総合研究センター
天台宗公式HP：http://www.tendai.or.jp/

❶ 満月

すべてのものは月の満ち欠けのように移り変わり、仏のみ永遠不変であることを示すために、満月の日を選んで亡くなられたといわれます。

❷ 沙羅双樹（四枯四栄）

八本の沙羅樹のうち、一方の四本は枯れて、もう一方の四本には花が咲き誇っています。お釈迦さまの涅槃（四枯）と仏法の不滅（四栄）を表しています。

❸ 摩耶夫人と阿那律

天上の世界に生まれ変わっていた生母、摩耶夫人が別れを惜しんでやってきています。先導しているのは十大弟子の一人、阿那律です。

❹ 錫杖と錦袋

沙羅樹に、錦袋を付けた錫杖がかけられています。袋の中には不死の薬が入っていて、摩耶夫人が天上から投げ渡そうとしましたが、木にひっかかり届かなかったといわれます。

❺ お釈迦さまの金色身

仏の体が光を放つ時、それはさとりを得た時と、涅槃に入る時を示されています。

❻ 倒れ込む阿難

常にお釈迦さまのそばに仕え、その教えを最も多く聞いてきた十大弟子の一人、阿難が悲しみのあまり気を失います。

この他にも多くの逸話があります。

涅槃会について

お釈迦さまへの報恩感謝のために、亡くなられた二月十五日に行われるのが涅槃会です。天台宗では、平安時代に恵心僧都源信が比叡山横川で行ったのが最初とされています。

涅槃会は、お釈迦さまの入滅の様子を描いた涅槃図をかけて執り行われます。生まれ故郷カピラヴァストゥに帰る途中、クシナガラの地、沙羅双樹の林で静かに息を引き取られたと伝えられます。涅槃は梵語のニルヴァーナのことで「吹き消す」という意味を持ちます。肉体から離れて煩悩の炎が消え、さとりの境地に入られたことを指しています。

また、涅槃図には諸天をはじめ多くの弟子たちや動物たちが描かれており、その一つ一つに様々なエピソードがあります。涅槃会のお参りの際には、お釈迦さまのお徳を讃え感謝し、涅槃図に描かれたそれぞれの意味についても考えてみましょう。

仏涅槃図（滋賀院門跡蔵）※非公開